

# 大 学 図 書 館 周 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町 34

京都橘女子大学図書館 田北十生気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

## 研究集会日程決まる！

日 時 6月20日(土) 12:30~17:00  
 会 場 京大会館(予定)  
 内 容 次号(3月号)でお知らせ予定です。  
 画期的なものにと支部委員会で検討しています。

### 第5回京都支部委員会の報告

#### 【報告事項】

(1) 会員情報 現在会員数 95名

(2) 財政状況(会費回収状況等)

\*会費未納の会員さんは、至急最寄りの支部委員または財政担当者に納入をお願いします。

(3) 新春合同例会の報告(京都支部参加者は、6名でした)

#### 【審議事項】

(1) 支部報について ①2月号について ②3月号について

(2) 1998年度研究集会について

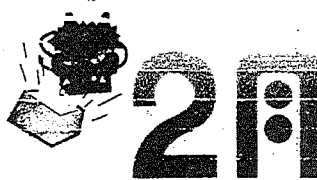
2月26日(木)に打ち合わせ会議

(3) 京都支部メーリングリストの設置について

東京支部がメーリングリストを開始したことに学び、京都でも実施して会員相互の親睦・連絡交流を深めることができるという思いで設置することにしました。これも詳しくは次号に掲載しますのでお楽しみに！

(4) 次回支部委員会は、3月10日

(出席者) 篠原、竹本、大館、堤、  
中嶋、井上、田北の各氏



目次	支部委員会の報告.....	1頁
	近畿4支部新春合同例会報告1.....	2頁
	近畿4支部新春合同例会報告2.....	3頁
	近畿4支部新春合同例会報告3.....	4頁
	連載小説 リュウ(4).....	5頁
	数珠つなぎ(24).....	6頁

支部報に関するご意見は最寄りの支部委員または編集気付(京都橘女子大学)  
 ☎ 075-574-4118 FAX 075-574-4124  
 ♥ kazuodesu@ma2.justnet.ne.jp) 田北まで

## 近畿4支部新春合同例会報告-1

## 近畿4支部新春合同例会「源氏物語と定信」を聞いて

大館 和郎

松平定信については教科書程度の知識しかなかったもので、あの寛政の改革で名高い政治家と「源氏物語」がどう結びつくのか、発表を聞くまでさっぱり見当がつきませんでした。

発表者の岡嶋さんによると、定信は膨大な量の古典を書写しており、最も好んで書写したのが源氏物語であり、実に7回も書写しているとのこと。しかもその中には縦5.5cm、横5.5cmの豆本に極細字で書写したものがあり、これが61歳の時のものだというから老眼とは無縁だったのでしょうか。

天理図書館には定信が書写したものが約千数百冊残っているそうです。その中に「今波恋」という源氏物語の書写日記があり、定信が作中人物に感情移入までするほど深く作品の中に入りこんでいる様子がうかがわれるという話は、なかなか面白く聞き、定信の知られざる一面に触れることができました。しかし調べてみれば、江戸時代の大名には学問・文化に熱中した人がけっこういることも事実で、定信のような人が例外的存在だとは思っていません。

世界各地の名物裂を収集し、細工所といわれる工芸品製造所を充実させ、加賀工芸の基礎を築いた前田利常。藩財政好転が引き金となって茶器蒐集を始めた出雲松江藩主松平不昧。集めた書籍が3万3千冊というビブリアマニア（蒐書狂）の平戸藩主松浦静山。松平定信をたずけて寛政改革を進めた若年寄・堀田正敦は豪華な鳥類図鑑を手がけ、最後の將軍・徳川慶喜は晩年、油絵を描いていたことが現在わかっています。岡嶋さんは源氏物語を中心に研究されているなかで、定信に出会い、興味をひかれていったと話されていました。写本資料を実際に整理するなかでのこのような体験というものを味わったことがないので、図書館職員として研究をすすめておられる発表者の岡嶋さんに大いに刺激された一日でした。

(おおだて・かずお 京都学園大学図書館)

## 【近畿4支部新春合同例会メモ】

日時 1998年1月24日(土) 午後2時30分～5時

会場 奈良市 国際奈良学セミナーハウス

内容 講演「定信と源氏物語」

講師 岡嶋偉久子(おかじま・いくこ)氏(天理図書館司書)

## 講師紹介

天理大学国文学科卒、甲南女子大学大学院博士課程修了。図書館では主に和漢稀書の整理を担当。専門は中古文学、特に源氏物語を研究し、学会誌に研究論文発表多数。

主催 大図研奈良支部(支部長 秩父直子・・奈良議会図書室)

## 近畿4支部新春合同例会報告-2

## 定信のストレス解消法 1998年近畿4支部合同例会に参加して

呑海 沙織

駅をおりると、すぐに古都の香りがした。厳しい寒さを背に、ゆったりとした空気を思い切り吸込みながら、セミナーハウスへと向かう。セミナーハウスというカタカナの似合わない木戸には、「鹿がはいるので、必ず閉めて下さい」の張り紙がある。冬の厳しい季節には、餌がなかなかみつからないので、葉牡丹などすぐに食べられてしまうらしい。

講師の岡冨さんは、天理図書館の空気をそのまま連れてこられたような、静かな方だった。けれど、ただの静かさではない。そこには、図書館員として働きながら博士号をとる、という情熱が秘められている。はんなりとした語り口調に、ついと引き込まれていく。

松平定信は、生涯に源氏物語を7回も書写した。現存しているものはそれぞれ、美しい装丁が施されており、定信の力のいれようがうかがえる。54帖すべてを極細字でたった4冊にまとめたもの、銀欄の桜を散らした金糸表紙の豆小本を月と花の銀金具付きの函割筆筥におさめたもの、と趣味の世界はとどまるところを知らない。源氏物語の書写日記として、定信は「今波恋」を残している。「今は恋」なのか「いまわの恋」なのか、定かではないが、定信が、感情移入しながら書写する様子が手に取るようにわかる。老法師の告げ口に不快になり、あるいは、柏木と女三宮の恋におろおろする様子は、親しみさえ感じてしまう。

定信といえば、寛政の改革である。文武両道に優れ、己に厳しく他人にも厳しい、そんな人物像がまず浮かぶ。質素儉約を進め、幕府の政治や財政の立て直しに努力したが、厳しすぎる緊縮政治に、民衆だけでなく武士にも不満がつわり、老中を解任されてしまう。この時、定信 36 歳。そして、それから定信の古典の書写時代が始まる。理想と現実のギャップから生れるストレスを、定信は、源氏物語を通じて見事に昇華させている。

OHP もプロジェクタもない講演会に参加したのは何年ぶりだろう。せかせか走り続けているような図書館生活を送っている私は、この近畿4支部合同例会に、なんだか呼び止められたような気がする。

(どんかい・さおり 京都大学電気電子工学科図書室)

## 「定信と源氏物語」講演を聴いて

田北十生

去る1月24日(土)の午後、奈良市「奈良学セミナーハウス」で近畿4支部新春合同例会が開催され、参加してきました。

京都からの参加者は、篠原、大館、竹村、酒井、呑海の各氏と私の6名でした。もっと多くの支部のみなさんの参加を期待していたのですが、多少残念な気がします。こうゆう機会を生かし、できるだけ多くの支部のみなさんとの交流ができればいいなあと思います。

家を出る頃は、それまで晴れ間の見えていた空が嘘のようで、雪が舞っていた。けれども奈良市に着いてみると雪はなく、身を刺すような冷たい空の風が人気もまばらな街に吹き付けていた。なんだか寂しいなあと思う一方、新鮮な気分にも包まれた。ところが、会場に早く着きすぎて奈良支部の秩父さんに早すぎると言われて、散歩に出かけることにしました。秩父さんのおすすめの「天極堂」というお店に行った。なるほど、感じのいいお店である。コーヒーがくるのを待つ間に、お店のアンケートの回答を書いた。インターネットで紹介したら楽しいだろうと思い、メールアドレスを書いて出したら、後日早速手紙を頂き、現在はまだだが検討したいという回答を頂いた。

本題にかえりますが、今回の合同例会は、「源氏物語と定信」というテーマで天理大学の岡嶋偉久子さんを講師として迎えて行われると言うことであつたが、会場で頂いたレジメには、「定信と源氏物語」となっていたので、僕が少し引っかかっていた疑問が説けてすっきりした。

約1時間半の講演を岡嶋さんは、方丈記ではないけど、清流がささやきながらさらさらと流れ、かつ止まることを知らないと言うような講演で、僕はすっかり魅せられてしまいました。

定信は、多くの書写をしているが、源氏物語は7回も書写を行ったとか。それも、ものすごいスピードで行っている。そのエネルギーに頭が下がる思いがします。しかし、僕はその話を聞きながら、逆にそこまでさせる「源氏物語」のエネルギーというか魅力の根元はいったい何なんだろうという思いがこみあげてきました。源氏物語は、書かれた当時は世界最長の物語だと聴いていますが、だとすると、それを書いた紫式部のエネルギーたるや凄まじいものを感じます。元来ものを書くのは非常な労働で疲れる。卑近な例では、あの「失楽園」を書いた渡辺淳一氏でさえ、「当分書きたくない疲れた」と漏らしたとか。

紫式部なる人物を突き動かして、前例のない構成と長さで完成させていったエネルギーの源泉は一体どのようなものであつたのだろうか、思いは果てしなく寒風の荒野を駆けめぐるのである。小林秀雄がいうように紫式部は人生の深淵を覗いてしまい、それを自己の中に抱え込んでしまったのだろうか。いずれにしろ、恐ろしいまでのエネルギーを自己のうちに抱え込んだものにしか、このような作品はかけなかったであろうことは、容易に推測できる。源氏物語の評価は、巷に溢れているが、僕には「魔」さえ感知させる恐ろしいまでの裸の人間の「生」への執着！をもって読む者に迫ってくる気がします。そこに源氏物語のエネルギーのマグマを感じるのです。源氏物語をこんな風に読むのは、僕だけなんですか？

(たきた・かずお 京都橘女子大学図書館)

## リ ユ ウ

作 西田 治

淳一がリュウを近くの公園から拾ってきた頃は、胴回りだけが大きな短足の子犬だった。真っ直ぐに歩けなくて、斜めに歩いていた。捨てられたことを知っているのか大変な寂しがり屋であった。とりあえず玄関の三和土で住むことにしたが、油断すると上がってきて台所や居間を歩き回った。リュウは、居間でごろ寝を決め込んでいる猫の洋子を遊び仲間にしたくて、何かとすり寄っていくのであるが、洋子の方は、リュウの短いしっぽに多少興味を示す以外は、全く相手にしない。

ある日、たまりかねたリュウが洋子の気を引こうとして、洋子の尾をくわえて引っ張ったものだから、洋子が怒ってリュウの鼻を引っ搔いてしまった。リュウは、驚きと痛さで泣きながら部屋の中を走り回った。淳一に菓を付けてもらってやっと落ち着く有様だった。

以来、リュウは、洋子が嫌いになった。洋子の姿を見かけると洋子の周りを走り回って吠えた。洋子も負けてはいず、牙をむいて恫喝するのである。しかし、結果は逆効果で、リュウの吠え声が一段と大きくなるだけだった。洋子は、仕方なくゆっくりと立ち上がり、二階へ向かう。そうなるとリュウは、勢いづいて洋子の後を追う。リュウは、階段を二段ほど上がるのが限度で、そこから落ちて泣き出してしまった。階段の上から洋子が振り返り「ざまあみる！」と言いたげな顔でリュウを眺めていた。

しかし、リュウがそうやって部屋で遊べるのもそう長くはなかった。リュウが廊下に足跡を付けたら、柱に小便をしたからである。僕は淳一を説得して、リュウを庭につなぐことにした。淳一は段ボール箱に布をいれ、リュウの住処を作ってやった。ところがリュウは、それを無視して使おうともせず、ただもう家の中に入りたくて泣くのである。その声たるや何とも悲痛な感がして、僕でさえ、危うく家に入れてしまいそうな気になりそうであった。淳一や美穂が可哀想だと同情して家に入れてやったらと言うのであるが、僕はしっかり遊んでやることだと譲らなかった。

1ヶ月程たった頃、リュウに異変が起きた。まず、最初に気がついたのは、家に淳一が帰ってきてても、以前は待ちかねたようにはしゃいでいたのに、淳一を見ても、尾を振るが、あまり元気がないような風である。しかも、ドッグフードが食器に残ったままになった。

我が家では、一番先に家に帰ってくるのは、小学生の淳一で、美穂はまだ、保育園である。次に散歩に連れていくときの喜び方が以前ほどではなくなったという。かといって、体調を壊している様子もない。水さえもあまり呑んでいる様子もないのである。

家族で原因について話し合ったが、これという結論もでないまま、11月も終わろうとしていった。

その数日後、家族の誰一人想像さえもできなかった大事件が発生したのである。

(次号に続く)



